慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮本又次氏著 株仲間の研究
Sub Title	
Author	伊東, 弥之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.7 (1938. 7) ,p.1003(145)- 1009(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19380701-0145
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380701-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

分資本の循環と云ふ立場より認識するが爲めに、貸借對照表の各種項目の價値として、これを費用と給附の原則より考察し、從つて、簿記上の價値より離隔せるものを與へようとすることは、立場の相異上當然ではあるまいか。而して又こゝに「時價論」の存在の餘地の當然に是認せらるべきものがあるのではないかと考へる。

ともあれ、本書が會計學思考を純化する上に多大の寄與をなせることは多言を要せぬところである。唯本書に說かるゝ諸方法はこれを手にするものゝ立場によつて若干の相異の存するのではないかと思ふ。小菅教授の指摘するところではあるが、經營分析はことに米國に於いて、これを發生史的に見れば、一、興信者の財政表分析より、二、放資者の財政表分析、三、企業者の同表分析へと發展（經營學論集第九章）してゐるとのことであるが、其の立場の相異により同じく企業經營の良否と云ふも其の內容に若干の相異あり、各方法が他のものよりより多く特殊目的の爲め妥當するものゝ存するのではないかと考へられるが、教授がこの點に就いて尙ほ教を垂れたならば一層其の精彩を增したことゝ思はれる。

（東洋出版社、三五四頁、貳圓）

宮本又次氏著「株仲間の研究」

伊東彌之助

この數ケ月間に日本の經濟史の學界には、二つの力作が東西から發表せられて人々の話題に登つた。然もその二力作は頗る對照的でもある。一は大塚久雄氏著の「株式會社發生史論」であり、他はこゝに紹介せんとする宮本又次氏著の「株仲間の研究」である。前者は人も知る東京帝大本位田博士門下の逸才、後者は京都帝大本庄博士の流れを汲む新鋭である。共に若さに於いて匹敵し、相異る學統を双肩に擔はせて競ふた點、誠に偉觀である。然も兩氏の研究對象は洋の東西を異にするも、共に封建制下の商業資本にそゝがれた。即ち大塚氏は株式會社發生への資本の集中形態、その資本集中は謂ゆる前期的資本であつたから、その主要題目はその前期的資本の解明とその集中形態の展開にあり、宮本氏のは日本に於ける會社制度成立の實際的基礎であつた株仲間の綜合的研究を目指す。二論著が殆んと同一期間の、同一部門の問題を俎上に載せた事は、最近の經濟史學の傾向を物語るものとして興味が深い。扨、我が德川時代の商品・貨幣經濟は前時代に比して著しく進歩したとは云へ、未だ自然經濟的な封建制度治下にあり、而も鎖國と云ふ不自然な政治的束縛が加はつてゐたから、その生產規模は小さく、交通機關の發達も未熟で、商品市場は甚しく狹隘なものであつた。從つてこの狹き市場に生存せねばならぬ商人は、勢ひそれ自らの保身の爲

めに仲間を作つて競爭を排除し獨占に努める。これら仲間は初め單に私盟であつたが、後種々なる理由の下に公認せられ株仲間と稱した。この頃に於いては單に獨占・排他のみでなく、仲間内には連帶的性質を持ち、或は靜謐なる社會に身を委ねて著しく保守的氣分を横隘させた。故にこそ、獨占・排他を忌む執政者にも株仲間が公認された譯である。株仲間はかゝる當時の社會的・經濟的必要から生じたものであり、當時の商業取引はその庇護の下に圓滑に營まれたものである。かゝる意義を持ち、德川時代經濟組織の研究には逸すべからざる株仲間にして、從來纒まつた研究が嘗つて發表せられなかつた。蓋し株仲間は初め私盟であり、土地により年代により異る發生・發展をなし、爲めに個々株仲間の研究は容易なるも、綜合的研究をなすには夥しき史料を集め、それの丹念なる分析、再編成といふ多大の努力が必要であつたからであらう。今、宮本氏はその二條件を兼ね備へて我々の前にその研究を發表する。全篇八章、四百三十四頁に渉る大冊で、歷史ある日本經濟史研究所研究叢書の第九冊を構成する。以下その大要を摘記紹介したい。

株仲間發生の遠き先蹤を尋ねるならば或は上古の「部」にまで遡らねばならぬが、著者は株仲間の直接先行形態たる「座」の嘗見を以つて第一章を初める。座は平安朝末期に萠芽を發し、室町時代に顯著な發達を遂げた。それは公家・社寺と關係し、その庇護の下に營業權・諸役免除權・關税免除權を得て活躍せる集團であり、その成員は初め樂人・畫人・神人までも雜多に含んでゐたが、後期に及び手工業者乃至商人の營業獨占團體化する傾向が强くなつた。即ち著しく後の株仲間の面貌を帶びたのである。然し戰國時代を經て、分權から統一的封建社會へ移向し、それに伴つて商品・貨幣經濟が進展するの時、座は崩壞乃至解散されざるを得ない。何故なれば座は著しく分散的であり、臣從的であり、その成員の職業分化も甚しく後れてゐたからである。樂市・樂座なる座の解放の根本意義はそこにあり、澎湃たる自由商業が次で行はれた。然し德川氏による統一が完成し、鎖國が勵行され、商品・貨幣經濟の進展が一頓座するや、物皆あるが儘の狀態に定着膠著せしめんとの機運が現はれる。かくて商工業者間にもその保守・傳統・統制を重んずる傾向が生じ仲間が成立するに至る。第二章に於いてはその仲間成立過程を江戸・大阪その他の各地別に見、續いてその公認方針を大體四段階に分ち得る事を指摘する。即ち(一)慶長より寛永に至る間は外國貿易の統制或は警察的取締上、又は幕府に對する功績の反對給付として認可され、(二)寛文・延寶以降には配給量及び價格の統制、或は不正商行爲取締のため、又命令傳達の單位として認められ、(三)享保以後としては特定事業の保護育成、事業界の紛爭除去、都市繁榮のため、最後の(四)明和・安永以降にては幕府財政救濟のため、冥加金上納の有無により極めて放漫に認可されるに至つた。

かくて成立せる株仲間は如何なる組織を持ち、如何なる機能を有したかは、次の第三章、第四章が之を詳說する。この部分は全頁の半を含み、實に豐富なる史料を以て實證し、之が說明に著者が最も努力した箇所に屬する。株仲間の組織に就いてはその構成・機關・精神及び負擔の四節に分つて述べられる。株仲間は株を持つ同業者の團體である。株とは本來樹木の切株のことであつて、それは冬、農夫が或は燒き、或は伐採するとも、春には再び芽を發する。それが「近世社會に於いて譜代制度・世襲制度が固定すると共に、地位・身分・格式・業務を世襲し拔けざることを株と稱し、その數が限定さるゝに及び、一の權利となり、更に之が賣買・讓渡の客體となるに至つて、株又は株式の概念が固定するに至つた。」この株は增加性・限定性・移轉性・貸借性及び擔保性なる五屬性を持ち、それあるに依つて株の增減・移動が生じた。これを株仲間全體の立場より見る時は、其處に株仲間への加入・脫退・名義替・轉宅・別宅等の變化となり、株仲間構成員の變動となる。株仲間の機關にはその總體意思の結成のための寄合がある。寄合は

仲間全員の集合によるものと、その役員のみ集るものがある。仲間の役員には年行司・月行司等があり、寄合をなすのみならず、仲間に關する平生の事務を取扱ひ、或は仲間の統制を行ひ、對外的には仲間を代表する行爲を爲す。これら事務・寄合をなす場所を會所と呼ぶ。株仲間は株の集合であるが、單なる集合でなく、それが緊密に融合一體化するの時、そこに集團精神が生ずる。この株仲間の精神を摘出し說明せる箇所は、本書の最も特徴的なる部分を形成した。即ち著者は株仲間がその機能より見て功利的な經濟主義に基いてはゐるものゝ、尙それ以外の宗教的・保守的・連帶的精神が強く作用してゐた事を主張する。從つて株仲間は單なる功利的團體ではなく、遙かに廣き範圍の生活面に聯關する共同社會的要素が濃厚に存在したと解釋する。最後に株仲間の負擔では、大部分の株仲間が必要とせる冥加金、上納及び課役、それに仲間內部の諸費用の實例・捻出方法を考察して組織を說明せる章を終る。

次ぐ株仲間の機能の章に於いては、その經濟的機能を主として說明する。株仲間にあつては政治的機能も文化的機能も存在した。例へば統一的な成定商法なき當時にては株仲間の規定する商慣習がその基準となりし如き、或は裁判沙汰なども奉行所の手に至らざる內、仲間內にて解決し得た如きは前者であり、株仲間が飢饉等の際に救恤的諸工作を行つた如き、或は當時の實業教育は株仲間を通じてのみ可能であつた如きは後者に屬する。然しそれらは何といつても副次的な機能であつて、本書が經濟的機能のみを詳しく取扱つたのは正しい。經濟的機能には四つある。即ち獨占・權益擁護・調整及び信用保持の四機能である。その內容はその呼稱によつて大體を推測し得る樣に、獨占機能とは仲間內外の競爭を排除して、市場を獨占支配せんとする機能であり、權益擁護は獨占を全からしめる爲、取引相手を警戒し、或は牽制し、又は自己の特權を主張するの機能を指し、調整は商取引の圓滑を期する爲に公正價格を定め、取引上・運送上の協定をなし、或はその內部の人的統制を劃したりする機能、最後の信用保持とは商取引上、信用を得る爲になす機能であり、結合精神の强化、獨占その他の機能に基く信用增大、取引相手の尊重・不正行爲の排擊に基く信用保持の努力等が之れである。

扨、それら四機能は同一の强さに於いて各仲間が所持したものでなく、又時期に於いても强弱あるを免れない。全體を綜合して考察するに大體株仲間はその發展期には調整・信用保持機能が强く働き、後期になるに從ひ獨占と權益擁護機能が露骨化する。前者の强き內はその犧牲的・公共的使命からその存在は容認されたが、後者、殊に獨占の强化は物價騰貴の原因と見做され識者の反感を買つた。加ふるに株仲間內部も後期になるに從ひ、仲間總體意思への絕對服從觀念は稀薄になり、從つて株仲間の排他性は弱められる。この內面的脆弱は驅つて獨占なる外面的强化を以て補はんとし、社會の指彈を更にあびるといふ風に、株仲間は漸次衰頹過程をたどる。その間天保改革、嘉永の問屋組合再興、安政の株仲間復活の布達等の政治的經過が織交ぜられ第五章を形成する。

かくして明治維新となつた。因習打破、營業自由への轉換は必然的に封建制下の產物たる株仲間を解放せずんば止まない。明治元年政府は諸株存置を聲明したが、そは一應の人心安定策にすぎない。「商法大意」の發布は舊株札を廢し、新鑑札をより廣き範圍に分ち、實質上舊來の株仲間を枯死せしめた。更に通商會社下の商社は多く株仲間を以て結ばしめたが、その短期間にして失敗し消滅し去つた事も、株仲間解放への一道程になつた。土地により差違はあるが大體明治五・六年迄に、株仲間解放令は全國に發布された。この株仲間の解放過程が第六章をなす。次でその結果、商法不羈に流れ、取引は紊亂する。政府は商社設立を勸說してその回復を圖るが失敗する。そこに新しき仲間たる近代的同業組合が發生し發展するといつた經過を第七章が取扱ふ。最後の第八章は結論として座・株仲間及び同業組合の比較對照及びそれ〴〵の時代的特性、株仲間と近代會社制度との關係、最後に封建社會の機構を

簡單に分析して株仲間の存在・發展・衰頽を意義づけて筆を置く。

以上が本書の大要であるが、この粗雜なる紹介を以てしても、株仲間自體の綜合的研究書としては本書は完璧に近いものたるを知るであらう。蒐集せる廣き史料とその努力的な分解・綜合がこの書では徹頭徹尾人の目を眩惑する。その點で我々は本書を江湖に推賞するの辭を惜しまぬものである。只、慾を云ふならば本書はあまりに株仲間自體の說明に主眼を置きすぎて、その背景との關係を考察する事が少い。その發生より崩壞に至る過程を社會の發展過程に照應して述ぶる事が甚だ少いことである。この事は著者一人に限らぬ。著者の學統に屬する人々の、歷史解釋に對する理論的武器を過小視する通弊に災されてゐるのである。例へば著者の最も力を盡くした株仲間の精神の取扱ひに於いても然りである。著者の擧げる三精神は如何にも株仲間に存在した。然しそれは封建制下に生存し、その雰圍氣に同化してその樣な色彩を多分に持ち得たものである。つまり封建社會の精神なのであつて、著者が特にそれら經濟外的精神をより一層重視し、以て株仲間の特質と呼稱する程ではない樣に思ふ。株仲間の特質といふより、それに同化せる過程の分析がより以上必要なのである。

尙、本書は著者が昭和八年「大阪に於ける株仲間の解放」なる論文を發表して以來、各種學術雜誌に載せた株仲間に關する論稿を、改めて體系づけるため解體し、加筆補訂、且つ組み變へたものであり、それらを骨子とするも全く別のものである。株仲間は前にも觸れた樣に、地域的にも內容的にも甚しく錯雜してゐる。この事は特殊的事情が甚だ多い事を意味する。故にこそ本書の如き力作的綜合研究書が必要なのであるが、同時に特殊事情の理解も亦必要である。よつて本書を讀せる人は註に引用せる個別論文を更に併讀さる事を御奬めしたい。それによつて株仲間に對する一層の理解が加はると共に、その場、その時に應じた便法を以て政策とする事の多かつた同時代の認識を更に深め得ると信ずるからである。本書の附記によればそれら論文は他日論文集として世に送らるゝ豫定の由である。一日も早からん事を希望して止まない。